

鹿沼市旧市街の歴史的生活環境に関する研究 A study on traditional life environment in old part of Kanuma City.

Keywords: 住処 旧市街 都市構造 表裏 入れ子

建築材料研究室 渡邊貴明

1. 研究目的・方法

各都市における近代以降の急激な開発により、長い時間をかけてゆっくりと育まれた人間関係や綿密な空間構成は解体され、人間のために為されるべき都市開発ももはや人間の身体スケールを大きく逸脱している。それは文化性を無視し効率性を優先した、町づくりに関する明確な理論を持たない開発を押し進めたことに一因がある。

栃木県鹿沼市もその例外でない。中世以降、城下・宿場として栄えた鹿沼市旧市街は地勢、道路計画、街区構成、建築デザインなど都市の各レベルにおいて人間の身体性に合った生活環境を形成し、豊かなコミュニティや調和のとれた町並みを生む母体となった。しかし、近年の開発の中で子供たちの遊び場、近所付き合いの場であった路地空間には都市計画道路が貫き、それまで安心して歩くことのできた町には多くの自動車走り回るようになる。多様な都市景観を生んだ路地は無性格な住宅地に置き換わり、そのようにして町の表情を失った住空間に住人は愛着を感じられない。

調査地は中世以降、城下・宿場整備に伴う計画的な都市改造を受けた地域であり、その歴史的背景の重層に新興地とは異なる生活空間の質が認められる。とすれば、我々はその都市基盤の実態と意図を読み取り、将来の環境形成に活かしていくことが鹿沼の地域性を尊重した都市づくりを実現し、また、地方の自立という点においても必ずやそこに手がかりが見出されるべきであると考え。本研究は上記背景のもと、鹿沼市旧市街を調査対象に、文献・実地調査によって「町」「街区」「建築物」という都市の構成要素である各レベルの歴史的空間の実態を調査した、将来の環境形成に向けた基礎的研究である。

2. 都市の形成過程

古代人が平地に住処を形成することは稀で、沢や盆地など山に囲まれる閉鎖的な土地に好んで住み着いた⁽¹⁾。足尾山地からは沢が何本も東に伸び、調査地はそれらの出口に位置する(図1)。沢はもちろん調査地も台地に囲まれる盆地に似た閉鎖的土地を示し、古代より人々が住み着いた土地の条件を満たしている。

1532(寛政3)年に壬生氏によって鹿沼城が築城され、同時に同氏は壬生から鹿沼へ本拠を移した。⁽²⁾この頃既

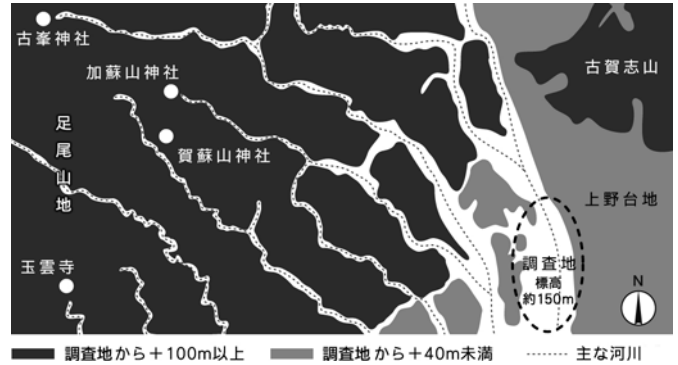


図1 調査地及び周辺の地形と沢の位置図

に田町通りと黒川の間には町場が形成されており、その経済的成果を押えるための築城であったが、⁽³⁾理由はそれだけでない。西・北の山々を背後に据え、東の上野台地や黒川を要衝にし、南に開けた平地を見下ろす城の立地は、城下建設における地勢の基本原則であり、土地の性格を良く読み、調査地の閉鎖性を十分に活かした築城であることが分かる。

その後、壬生氏は滅び鹿沼城は廃城となるが、1647(正保4)年に例幣使街道が制定されると調査地は日光登拝の要地・鹿沼宿として発展する。来訪者の増加に伴い商業基盤の拡充が求められ、街道沿いは短冊状の敷地が連続的に割られ町家が軒を連ねるようになる。また、宿の出入口に往来を取締まる木戸が設けられ、都市領域が明確に規定される。今日の、商店が建ち並ぶ集合システムはこの頃に基礎を持っていると言えよう。

1890(明治23)年の国鉄・鹿沼駅(現JR鹿沼駅)開設を皮切りに調査地にも近代化が及び、この頃から徐々にスプロールが起こる。更に昭和戦後になると調査地に自動車が走り始め、周辺の新興地の発生も伴い都市領域の拡散が急速に起こることで閉鎖的な一体性は薄れた。

3. 町の構造

3-1. 絵図に見る風景

調査地を描いた絵図には町場と共に周辺の山々が詳しく描き込まれたものが多い。図2⁽⁴⁾では西方の二股山などが大きく描かれ、今日目にする調査地における山並みの風景は江戸期においても都市と一体的に認知されていたことが分かる。他の絵図⁽⁵⁾を見ても調査地は古くより山々に囲まれた閉鎖的空間を持っていたことが分かる。



図2 鹿沼宿絵図/1712(正徳2)年

3-2. 道先の山

調査地の道には軸の中心に山を据えた道が認められる。とりわけ特徴的なのは古賀志山や二股山への軸設定である。道先に山を据えることで空間に閉鎖性と視覚的な秩序を与えている(図3)。



図3 貝島坂から二股山への眺望

3-3. 社寺

調査地内の社寺は背後に山が据わるよう計画的な配置が見られる。加えて旧市街エリアの出入口などには必ず配置されるため、道を歩けば脇目に社寺と山が捉えられ明確な都市領域が認知される(図4)。



図4 例幣使街道から薬王寺(石橋町)

3-4. 視線の通らない道

調査地内の道は十字路を避けるか屈折させることで視線の通りを遮断している。

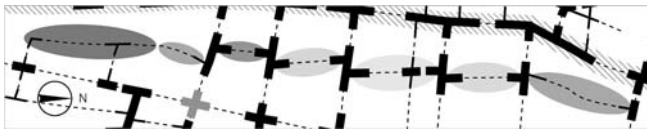


図5 例幣使街道に並行する裏路地の非十字路による空間分節/●部分は分節された街区

十字路を避けることにより空間の連続を断ち小スケールな街区に分節する(図5)。交差部では正面の建物に視線が捉えられ性格が強く印象に残る要所となる(図6)。また、交差部のズレにより道に順位付けが行われる。例えば、軸が終始ズレない例幣使街道や田町通りが再優位、そこに取り付く下横町通りや銀座通り、更にそれに取り付く裏路地の順に、公から私的空間へのグラデーションが起る。これは同時に道の広さにも反映され、交通・商業の流動的な広い道から落ち着いた生活空間のための狭い道へと段階的移行が見られる。



図6 裏路地の交差点(下横町)

3-5. 表と裏

〈3-4〉の道に見る優位性によって都市に表裏が形成される。交通や商業機能を担う例幣使街道や田町通りの流動的空間が表であれば、自動車の進



図7 石橋、寺町付近/1960(昭和35)年
四方の広い道が表、囲まれた街区が裏。

入しない路地が入組む停滞的空間が裏である。裏には十字路を避けた小スケールな街区が配置、平穏な住空間が形成される。表は裏に対するサービスの役割を持ち裏に生気を与える(図7)。しかし近年の区画整理により表裏のバランスが混乱、裏は表に取り込まれ住居は騒がしい表に露出し、安定的な住空間は自動車に侵されている。

3-6. 水路のある道

調査地には城下建設以降の水路が町中に廻っている。絵図⁶⁾によると近世期には例幣使街道の中央に水路が流れ道を東西に2分していた。流路や社寺の配置、高札場の位置を勘定すれば西側が市の立つような賑わいの停滞する空間、東側が流動的な交通の処理を受け持っていたと考えられる。

明治に入ると水路は街道脇に分流されるが、これにより町家と水路の間に带状の水縁空間⁷⁾が生じる(図8)。売り物が並ぶ店の延長空間、また子どもの遊び場となり、多様な街路景観を生み出した。

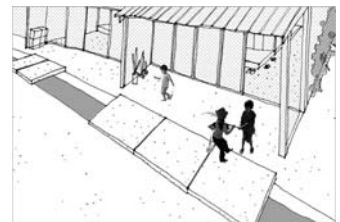


図8 水縁空間のイメージ

4. 街区の構造

調査地に見る各住戸の敷地はその空間的使われ方によって図9のa1~4、b1~5、c1,2の計11パターンに分けることができる。その敷地パターンの集合の仕方によって各街区は性格の違いを見せるが、その各街区をA~Hにタイプ分けし、その特徴を述べる。

4-1. 街道沿いの街区(各タイプ位置は図16を参照)

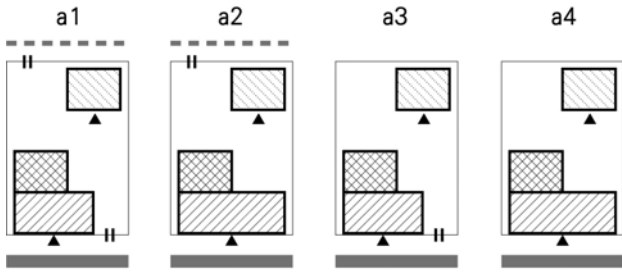
Aタイプ | 江戸期以降の伝統的パターンが最も残る街区である。a1、a2、b1、b3により構成され表通り側を商売、裏路地側を私的用途に使い分ける。裏路地と敷地の接線には水路が流れ、各住戸専用の洗い場が設けられた地区では野菜を冷やしたり子どもが魚を捕ったりする風景が見られた。また裏路地で町内の祭が開かれることも多く、小スケールなコミュニティが存在していた。さらにb1、b3のように居住者以外でも通行できる敷地内路地が多く、盆栽や植物が歩行者に多様な路地景観を感じさせる。

Bタイプ | a1、a2、b2、b4、b5で構成され、Aと同様

に伝統的パターンを示すが解放された敷地内路地がない。

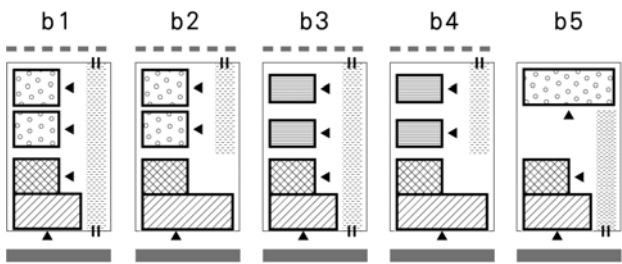
Ⅰ a. 町家（完結型）

一つの敷地に原則一世帯が住む、一敷地完結型。街道沿いに町家を設け商売をし、裏側に母屋、庭、蔵、離れなどを置く。



Ⅱ b. 町家（小コミュニティ型）

一つの敷地に複数の世帯が住む、所有者が街道沿いの町家で商売をし、裏側に母屋や貸長屋、もしくは独立住宅を置き、敷地内に路地を通すことで出入りする。



Ⅲ c. 独立住宅型

商売を原則行わない。敷地が短冊状でなく不整形である場合が多いため連続する際の規則性がない。よって町並みやコミュニティを構成することが少ない。

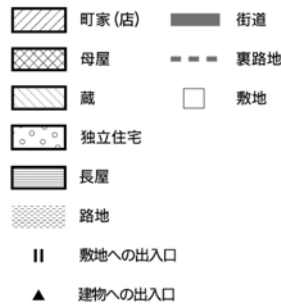
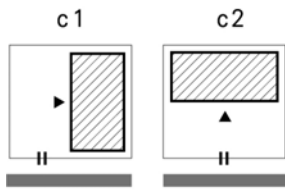


図9 調査地にみられる敷地タイプ

Cタイプ | 以前はA・Bタイプと同様に伝統的街区を形成したが、近年の区画整理により大幅な改変が行われた地区である。都市の表裏が喪失し、広い道路と各住戸が直接接続されるために騒々しく不安定な住空間が形成される。町と住戸の緩衝的役割を担うべき街区が機能していない。

Dタイプ | 中世末期には鹿沼城の家臣が住み、当時はそれぞれ大きな敷地であったが徐々に敷地が割られた。A・Bタイプのように敷地内路地や裏路地は通らず、a3、a4、b5、c1、c2が背中を合わせて立地するため路地を介したコミュニティが生まれにくい。しかしながら独立性の高い敷地に明治期以降の洋風建築が多く立地し、旧武家地らしい閑静な都市景観が形成される。

Eタイプ | 〈3-5〉の“都市の裏”に立地し、c1とc2で構成される街区である。通りから路地を入った奥に位置するため閉鎖性が強く平穏な住空間が形成される。

Fタイプ | a3、a4、b5で構成される。裏路地が通らな

いために路地を介したコミュニティは発生しない。

Gタイプ | 神社を中心にした面的な街区が構成される。境内から周囲に伸びる路地にc1、c2の敷地が配置され、精神的シンボルとしての神社が空間を秩序付け、一体性のある強いコミュニティを支える。

Hタイプ | 近世の宿場域外、明治期以降に開発された街区。強い計画性はなく、畦道から発展した道に、全ての敷地タイプが混在する自由な展開を持つ地区である。

4-2. 御殿山周辺の街区

御殿山周辺は中世の鹿沼城郭・武家地として開発された地区である。現在でも街道側を見下ろす斜面を利用した独立性の高い敷地や、塀や門が庭を囲む平穏な敷地が多い。行政機関が集中的に立地することも古くからの政治的中心がこの地にあることを示している。

鹿沼城の南側を固めた帯状の地区に立地するIタイプ、効率的な武家地配置が見られるJタイプ、医院が多く高い塀により強い閉鎖性を示すKタイプ、御殿山の斜面を利用した独立性の高い敷地の並ぶLタイプなどに分類でき、いずれもc1、c2を示し、板塀や石塀、門を備える住空間を持つ。

5. 建築物の構造

伝統的な街区では建築個々がバラバラなタイプを示すのではなく、その地区の歴史的経験の蓄積により同一の建築的解決をとる。調査地の建築タイプは以下の6タイプであり、各代表する建築物の図面を図10~15に、分布を図16に示す。

ア. 町家系 (図10)



図10 N住宅(寺町)平面図 縮尺 1/400

隣家と空きを持たない短冊状の敷地に効率的な連続配置がされる都市型建築であり、通りと強い空間的関係を持つ。通り側に店、後ろ側に倉庫や庭を持ちそれらを繋ぐ通り土間沿いに居住空間を設ける。

イ. 町家型住宅系 (図11)

町家系を基礎に持つが、店部分を縮小させ専用住宅化していったタイプ。短冊状の敷地でない街道から離れた地区に多い。



図11 T住宅(下田町2丁目)平面図 縮尺 1/400

ウ. 町家+屋敷系 (図 12)

通り沿いに店を設け町家系の特性を示すが、自由な平面、風破を見せた玄関や広い庭などの武家屋敷の様相を併せ持つ。



図 12 W家住宅 (泉町) 平面図 縮尺 1/400

エ. 町家+農家系 (図 13)

町家系をベースにするが、広い敷地にも拘らず単純な平面配置に縁側を廻す農家の特性を併せ持つ。



図 13 H家住宅 (寺町) 平面図 縮尺なし

オ. 屋敷系 (図 14)

御殿山周辺に多く分布するタイプ。塀と門が庭を囲む独立性の高い敷地に、風破を正面に見せる玄関を設け、武家屋敷の風格を残す。



図 14 H (上材木町) 立面図 縮尺 1/200

カ. 農家系 (図 15)

旧市街の外れに多く分布するタイプ。広い敷地にも拘らずコンパクトな平面配置を持つ。調査地の南に位置する農村集落・旧奈佐原宿にも同様のタイプが多く見られ、近辺における街道沿い農家建築の典型であると考えられる。

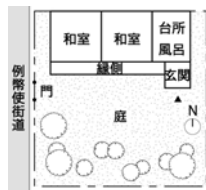


図 15 M家住宅 (泉町) 平面図 縮尺なし

6. 結論

○町の構造 | ①山を壁として閉鎖性を得、象徴として空間を秩序付ける。②十字路を極端に避け、交差部をずらすことで小スケールな街区に分割する。③水路は街道に広場と交通を共存させ、分流後は水縁空間を生み多様な街路景観を生んだ。④都市に表裏がある。表は流動的な商業・交通機能を、裏は停滞的で落ち着いた住空間を担う。⑤上記特徴は近世期から継承される構造である。

○街区の構造 | ⑥街道沿いでは通りと裏路地に挟まれ公私によって使い分ける街区が多い。御殿山周辺では地形を活かした武家地の集合システムがよく残り、塀や門、庭の植栽が豊かな景観を生む。⑦多くの街区で路地が住戸と町をクッションのように繋ぎ、また緩やかに分離することで④の表裏を保っている。

○建築物の構造 | ⑧城下や宿場としての歴史、農村地域でありながら例幣使街道によって都市性が流入した立地などにより 6 種の多様な建築タイプが見られる。

○全体 | ⑨山や台地が調査地を囲み、視線の通らない道が、通りから一步入った街区に閉鎖性をつくり、街区と路地が各住戸と町の距離を生む、という、入れ子状の都市構造が認められる。古代人の閉鎖性を好む原始的空間欲求が調査地にも引継がれており、小スケールで落ち着いた生活環境が残る。

入れ子の都市構造は歴史的蓄積から生み出された、新興地にはない鹿沼市旧市街特有のものである。居住性の向上もしくは観光地整備などにおいても歩く意欲をかき立て、精神的安定を促す重要な都市資産であり、失ってはならない旧市街の生活環境における「顔」である。

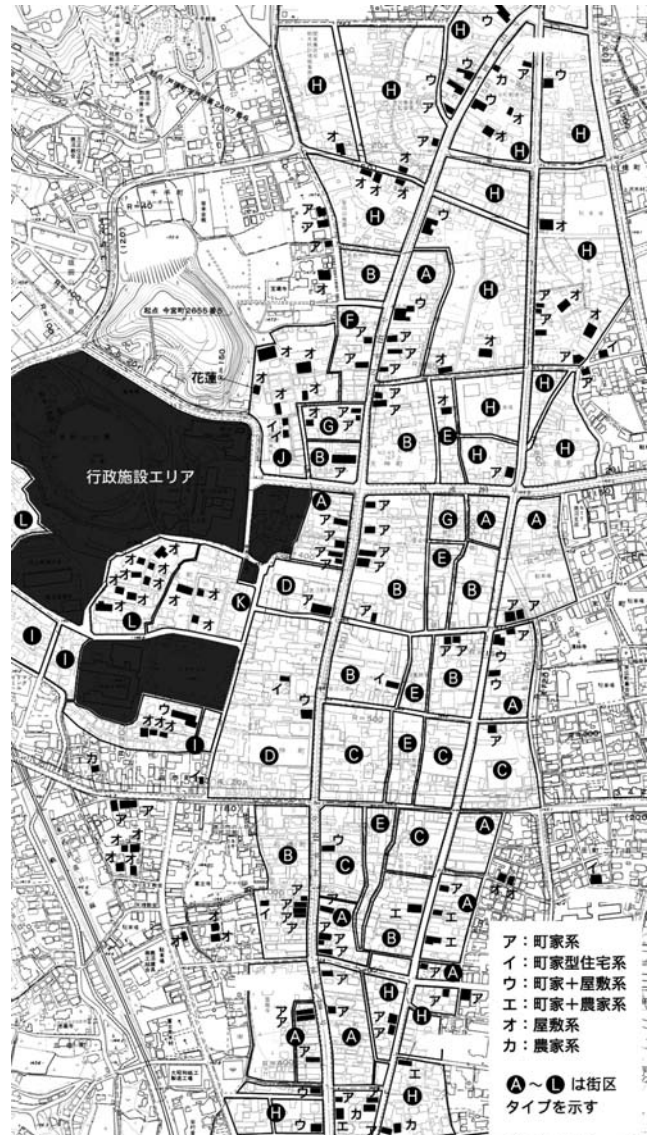


図 16 街区タイプと建築タイプの分布図

注 1) 柳田国男『地名の研究』角川書店 1968 年、樋口忠彦『日本の景観』筑摩書房 1993 年。2) 柳田芳男『かみま郷土史散歩』晃南印刷株式会社 1991 年。3) 鹿沼市史編さん委員会『鹿沼市史・地理編』鹿沼市 2003 年。4) 『鹿沼宿絵図』出典：『鹿沼の絵図・地図』同上 2005 年。5) 『鹿沼町実景』や『日光道中壬生通分間延絵図』等。6) 『鹿沼宿地引絵図』栃木県立博物館所蔵など。7) 渡部一之『生きている水路 - その造形と魅力』東海大学出版会 2003 年。